

川合委員コメント

2012年3月23日

参照基準の文案につきまして、趣旨を変えるものではありませんが、中国学に携わる者の立場から、少し加えていただいたらどうかと思う案を添付します。

「文学」が広義、狭義、二重の意味をもつということに関してです。明治期に西欧の概念を漢字、漢語に翻訳して、それが中国にも逆輸出されて現在も使われているわけですが（「社会主義」も「共産主義」も日本の造語！！）、「文学」に関してはもともと中国にあった重要な語を西欧近代の意味にずらして（狭めて）用いたようです。そしておもしろいことに塩川先生が書かれている西欧における *literature* の意味の変化とまったく重なるんですね。その箇所にも中国のことも書いていただければ、というのが加筆案の趣旨です。中国の「文学」はほぼ人文的教養といったような意味で、「孔門四科」の一つに数えられます。また「文」は「文学」をもう少し広げたものと捉えてよいと思います。

余分なことですが、やや詳しく記しますと、鈴木修次『『文学』の訳語の誕生と日・中文学』（『中国文学の比較文学的研究』、汲古書院、一九八六）では、明治八年（一八七五）、『文部省報告』21号の「開成学校課程表」の中で *literature* の訳語として文学の語が用いられたのが最初だと記しています。磯田光一「訳語『文学』の誕生—西と東の交点」（『鹿鳴館の系譜』文芸春秋社、一九八三）にも文学の語が大学制度の学科分類とからみあって成立したものであることが述べられています。訳語としての「文学（狭義）」はなかなか浸透しなかつたらしく、明治終わりの夏目漱石『虞美人草』に「哲学と純文学」と言っている「純文学」は狭義の文学の意味で、まだ「文学」だけでは独り立ちできなくて、「純」を付けたとのこと（鈴木貞美氏）。文学部の「文学」はまさに中国本来の意味で命名されたいところですが、戸川芳郎先生によりますと、明治の学制にあった文科、理科から出たもので、文学一部ではなく、文一学部の意味だろうということです。

以上、贅言を費やしました。

川合康三